

はじめに——世界の未来に向かって

小林康夫

『日本を解き放つ』——ふしぎなタイトルとなりました。

どこに向かって解き放つのか、もちろん世界に向かってです。日本文化とは異なる多様な他文化からなる「世界」という地平に向かって。

だからといって、この本をおして、われわれが行おうとしていることは、世界の他文化の人々に、直接、日本文化を紹介したり、説明したりすることではありません。いつか英語、その他の言語をもちいて、そうした本をつくることもあるかもしれませんが、そのためにも、まずは、われわれ自身が、日本文化を、その「内」にいながら、しかし「外」から視る視角を見出さなければならぬということなのです。

すなわち、真に越境的な交流が起こるためには、自分がいるその場において、いささかなりともその場を俯瞰する垂直的な視点の獲得が必要である、と言ってもいいかもしれません。

すでに明治維新の「開国」以来150年、多くの日本文化が世界へと運ばれ、紹介され、理解され、受容されています。「浮世絵から Manga まで」と言ってもいいし、「貞奴から舞踏まで」あるい

は「柔道から鮎^{すし}まで」、「京都学派から村上春樹まで」と言ってもいいかもしれない。文学も映画も建築もアートも海外で高く評価されている。日本文化への関心は高く、期待も大きい。わたし自身、外国の友人たちと話をしている、何度となく日本文化の（かれらの眼にうつる）「神秘性」への強い興味を打ち明けられています。それは、21世紀に入ってとくに強くなってきていると感じます。

あえて言うならば、それは、西欧文化がある種の限界点に達したという認識が広まっていることでもある。これまで世界を主導してきたルネッサンス以来の西欧文化が行き詰まり、破綻しかかっている、と多くの人に感じられはじめている。それは、根幹においては、西欧文化とはちがった歴史的發展をし、かつ近代化以降、きわめて効果的な仕方では西欧文化を受容してきている日本文化のなかに、未来を開くまだ知られていない「鍵」があるのではないか、という興味関心、いや、呼びかけなのです。つまり、日本を、世界の未来に向かって、解き放つてほしい、という呼びかけ。それに応えたい。だが、準備がいります。日本文化を未来に向かって開くべく、それが何であるかを世界の人々と「対話」するための準備——それこそが本書をつらぬく、慎ましい、だが激しい願いなのです。

こうして、本書が、かならずしも日本文化を専門とする研究者によってつくられていない理由を理解していただけたと思います。専門というなら、中島隆博は中国哲学の研究者であり、わたし小林康夫のバックグラウンドはフランス現代哲学です。

だが、われわれは、2002年から東京大学で、いわゆる「21世紀COE」予算などで運営されていたUTCP (University of Tokyo Center for Philosophy)「共生のための国際哲学教育研究センター」のメンバーとして、十数年にわたって、世界各地の哲学者たちと対話的研究交流を実践してきました。チームを組んで、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、ドイツ、フランス、イギリス、アイルランド、スイス、イタリア、ブルガリア、中国、香港、台湾、韓国、ベトナム、ミャンマー、インド、シンガポール、オーストラリア、イスラエル等々、多くの国に行きました。また逆に、多くの国の研究者を東京や京都に招きました。そうした場合、もちろん日本文化に還元されない現代の切迫する諸問題、共通の研究テーマについての発表も行うわけですが、同時に、かならず日本文化についての講演や発表も求められました。わたしは日本文化の専門家ではない、などという言い訳は通用しません。

日本文化から出発して、あなたは、われわれになにをもたらししてくれるのか、われわれにも理解できるようないかなる「哲学」を贈与してくれるのか、と問われる。そして、その呼びかけに答えられないようであるなら、——もちろんはつきり言われるわけではありませんが——、あなたはわれわれの文化も理解できないだろうし、われわれの「友情」に値しないだろう、ということになる。しかし、このような場合、日本文化の特定の対象をただもってきて、それについて一方的に論じるというのでは相手の期待に応えたことにはならない。よくあることですが、それでは一方通行で終わってしまいます。相手はかならずしも日本文化の専門家ではないので、ただ個別の対象を論じ

るだけでは十分ではなく、それを、一般化可能な水準におけるマクロなパースペクティヴにおいて語るのではなく、真の国際的なコミュニケーションへと発展していくことがありません。そのためには、われわれ自身が、日本文化についてのマクロなパースペクティヴをもつ必要があるのです。

だが、まさに言うは易しです。自分がそのなかに浸かっている文化は一般的な論理の水準で他者に語ることができるようにには認識されていません。生きた文化は、前意識、無意識の次元に浸透して組織されているからで、その人には「あたりまえ」のことであっても、それを異文化の他者に「翻訳」して論じることはとても困難です。しかも、「日本文化」といっても、統一されたひとつのものではなく、それは無数の他の文化が入り交じり、溶け合い、重なりあった複雑な複合体です。文化は他の文化との交流のなかではてしなく自己組織化を行い続けるダイナミックな生命体です。同時に、そのダイナミズムのうちには、変容を惹き起す契機となるコアとなる「文化遺伝子」、あるいは「基本的アプリケーション」のようなものもある。変化と同時に不変なものもある。その両方の視点から日本文化の歴史的な展開を、きわめて大きなパースペクティヴでつかみ直すことができな
いか、それが本書の出発点にあったわれわれふたりの問題意識だったのです。

以上から明らかなように、本書は、学術的な研究書でもなければ、いわゆる教科書でもありません。そうではなくて、これは、世界と日本とのあいだに立って、現在、活動している方々、これからそのような現場へと赴くであろうような若い人々に向けて、世界から日本に向けて発せられる

「呼びかけ」に応える準備をうながし、そのための「鍵」を手渡すことを願う本なのです。日本文化の具体的な項目については、無数の手引きがあり、参考文献がある。われわれは、そのようなひとつひとつのジャンルや対象について論じるのではなく、無謀と知りつつ、あえて「日本文化」なるものを、できうる限りマクロな視点から語りあってみたかったです。

昔からわたしはそう主張しているのですが、「知」とは「知識」ではなく、「行為する」ものでなければなりません。ここでは「行為」とは対話です。「世界」と対話するために、まずは、限りなく「世界」に近いその境界線の、しかし「日本」の側に立って、準備としての「対話」を行為すること。ひとつの結論を得るための「対話」ではなく、まずは「対話」を通じて、われわれの「日本」をおたがいに開くこと。

そのために、「いま、日本文化を世界に開くとしたら、あなたはど語るか」という問いにそれぞれが独立に応える短いエッセイを3、4本書き、それをもとに7回の「対話」を行いました。本書はその記録ということとなります。

最後にあえて言っておきたいことがあります。それは、本書の、とりわけわれわれの対話の底には、危機の感覚が共有されていたということです。すなわち、とりわけ今世紀に入って、世界そして人類の文化は、これまでにない大変化のなかに突入しているということ。情報革命、地球温暖化、環境問題、全世界的な社会不安の増大、資本主義のデッドロック、国民国家の揺らぎ、ポピュリズム

ム的政治運動……、さまざまな問題が複雑に絡みあうカオスの状況、人間のスケールをはるかに超えた文化変容をわれわれは生きているのです。この未曾有^{みせう}の危機的状況を前にして、われわれは、もう一度「人間とはなにか？」を問い直さなければならぬ事態に立ち至っています。だが、それをただ抽象的な一般的な問いとして考えるわけにはいけません。「人間」とはもつと具体的に現実的な、なによりも歴史のなかに根づいている存在です。だからまずは、われわれにもつとも近い「文化」としての「日本文化」をどのように受けとめ、それをどのように疑いもなくカオス的である「未来」の方へと開いていくのか、この問いに向かい合わないわけにはいかないのです。

日本を解き放つ——それは、過去の日本文化を世界に「輸出」しようというのではありません。そうではなく、日本文化を「未来」に向けて開くこと、どのように開くかを考えること。非力ではあるが、それがいま、われわれの思考の責務である。その思いが、この本を世に送り出すとすわれわれの願いです。

日本を解き放つ／目次

はじめに——世界の未来に向かって 小林康夫

〔巻頭対談〕日本をつかむ 1

- 火と水の婚姻 2 日本文化の本質をつかむ 6 インティマシーとインテグリティー 7
空海のインティマシー／インテグリティー 12 日本語という根源的条件 15
日本語の特性 17 「甘え」の構造 20 インティマシーと告白 22 内面と内奥 24
親鸞の「信」 29 「声」と「信」 32 「寄る」 34 物のカタリ 37
トレーニングから普遍へ 42 言語の根源性をどう把握するか 45 知性を鍛える 49

〔第一部〕〈ことば〉を解き放つ 53

複合言語としての日本語——空海『声字実相義』 小林康夫 55

- 日本のプラトン 58 深遠な言語の哲学 59 人は誰でも〈ことば〉する 60

身口意——からだ・ことば・こころ 62 声字分明にして実相顕わる 64

梵語によって理解する 66 和・漢・梵 67 複合口語——「即」の論理 68 漢字による複合語 70

複合言語——表音文字と表意文字 71 漢字と仮名の二重性 72

絵文字が加わった超文字文化 75

〔対談1-1〕 空海から出発する 79

「即」は実践的論理である 82 マルチリンガルな言語経験 85 漢字の問題 89

先人とともに哲学する——トマス・カスリス『日本哲学小史』 中島隆博 93

ともに哲学する 96 インティマシーあるいはインテグリティー 97

行きつ戻りつするバイ指向性 101 本居宣長と荻生徂徠——言語とリアリティーの関係 103

指示と表現 106 バイ指向性を体現した空海 109 日本哲学は空海のルフ 113 精神のふるさと 115

〔対談1-2〕 インティマシーからインテグリティーへ 119

本居宣長がいま語るとしたら 124 歌からはじめよう 126

インティマシーからインテグリティーへ 128 易のインテグリティー 134

カントの図式論と想像力 138 われわれの金剛界曼荼羅をつくり直す 140

理由Ⅱ 理性がない世界をどう生きるのか 143

〔第2部〕へからだを解き放つ 147

受け継がれる芸——世阿弥『花鏡』 小林康夫 149

文化を受け入れる「器」 152 ドイツ人外交官の『HARA——人間という大地の中心』 155

フランス人ヴォイス・トレーナーの「肚」 157 もうひとつのへからだの可能性 159

観世寿夫の「カマエ」と「ハコビ」 162 物真似と天女舞からの「幽玄」 164 老木に咲く「花」 166

〔対談2—1〕 世界で注目される肚 173

神仏のダブル・トラック 177 川端康成の温泉の女たち 180 エロスの喪失 185

ダンスと自由 187 『莊子』の渾沌 191

「自然」ではなく「作為」を

——丸山眞男「近世日本政治思想史における「自然」と「作為」

中島隆博 195

丸山眞男が求めつづけた政治的決断 197 誰が規範をつくったのか 198 享保の改革は復古的 201

「自然」を捨て去ろうとした丸山 202 「作為」を体現した『荀子』 204

かつての「後王」としての「先王」 205 言語間の変換コード 207

思考の出発点としての世界の複数性 209 もっとも創造的であった「古」 210

先王の道と礼楽刑政 211 徳川幕府が先王の道を実現する 214 「古」の反復可能性 215

徂徠が解放した「魔物」に可能性を見出す 215

〔対談2-1〕 根拠のないなか決断する 219

丸山が徂徠に見出したもの 224 自然に埋め込まれない思考の可能性 230

根拠のないなか決断する 238 礼とは「かのように」である 241 政治的決断における敵 244

〔第3部〕 〈こころ〉を解き放つ 249

近代の衝撃を受け止めた〈こころ〉——夏目漱石『こころ』 小林康夫 251

一方的に伝えられる手紙 253 父親を見捨てて東京へ 256 秘密を委ねられる 258

「黒い光」に立ち会う 264 西欧近代を生んだ「告白」 266 日本の「随」 269

死における日本の逆襲 272 「先生」の「妻」 277

民衆のための学——森鷗外『大塩平八郎』 中島隆博 283

未だ醒覚せざる社会主義 286 「国民的道德心」を陶冶した日本陽明学 286

明治維新は陽明学の精神を体现した 288 傍観者、鷗外 291 鷗外の切迫感 293

民衆のための「赤い陽明学」 296 地上的普遍性を目指す大阪陽明学 298

社会問題を解く陽明学 300 大塩のなかにある「自然」 302

中上健次に蘇る「民衆のための陽明学」 304

「対談3」 他者とともに変容する 307

明治の終わり 308 遺書というもの 311 近代的な死 313 秘密を継承する 318

破壊される自己 321 鷗外にとっての歴史 325 近代国家の問い直し 330 人の資本主義 335

他者とともに変容する Human Co-becoming 340

〔第4部〕 日本から世界へ 343

せめぎあう異形のなかに自分を見出す——武満徹『樹の鏡、草原の鏡』 小林康夫 399

日本文化の「問う力」 347 西洋音楽と日本の「音」がぶつかりあう
バリ島の音楽との出会い 353 宇宙的な（いのち） 357 349

〔対談4〕世界と向きあう芸術 363

3点測量 364 官能的な営為 367 吃音 369 武満さんからの葉書 371
ジョン・ケージからの手紙 374 異質なもののぶつかりあい 375 井筒俊彦「鳥のごとし」 379
翻訳不可能性 381 批評と哲学 383 大学で哲学する 387 武満徹から坂本龍一へ 392
都市―地球―カタストロフィー 395 病床のレシピノート 396

おわりに——ともに思考する友人へ 中島隆博 399